

「親孝行してください」は魔法の言葉

廣池千九郎エピソード 孝は百行の本なり

令和時代の親孝行

皆さんは「親離れ」できていますか？
子供のいる方は、「子離れ」できていますか？
こう問われたら、皆さんそれぞれに、いろいろな思いを持たれることでしょう。
「親離れ」というと分かりやすいのは、高校や大学を卒業して就職し、一人暮らしを始めて経済的に自立したタイミングが考えられます。

しかし、親元を離れて、経済的に自立しただけで、本当に「親離れ」したと言えるのでしょうか。
親から見れば、子供が独り立ちして自活している、というだけではとても安心できないこともあるでしょう。
かえって、親元を離れて暮らしているがゆえに、細かな状況が分からず、いらぬ不安が募り、精神的に「子離れ」できないことも多々あるものです。

最近では、子供の就職先や恋愛相手の条件にまで口を出す親もいるようで、なかなか子離れできにくい社会環境なのかもしれません。
そうした極端に子離れできない親もいますが、多くの親は激動する令和の時代、子供たちに何を期待しているのでしょうか。

昨年（令和元年）行われたアンケート調査によれば、四六％の親が「失敗しても立ち直れて成長できること」を、三八・九％の親が「自分の力で道を切り開けること」を子供に期待しており、全体の八割以上の親が、子供に自力でたくましく生き抜くことを願っていることが分かります（ウーマンエキサイト×まちこみ調べ、https://woman.excite.co.jp/article/child/rid_E1559816171245/）。

立ち直って成長する力や道を切り開く力とは、いわば「人間力」といえます。激動の世の中を生き抜く人間力を身につけるこそが、親の安心感につながります。令和時代の親孝行は、そのような形なのかもしれません。

親孝行の不思議なチカラ

困難を乗り越え自立した人間として、社会で力強く生きていくための力「人間力」の土台をつくるものがあります。それが「親孝行」です。総合人間学モラロジーの創建者・廣池千九郎（二八六六～一九三八）は次のように述べ、親に「安心」してもらうことが真の親孝行であると説いています。「親孝行は親にご安心して頂く

ということが第一の眼目です。たとえば薄給（はうきゅう）の息子が不相应（ふそうおう）なことをして親をよろこばせ、親孝行と思っても、親は考えます。なにか不正なことでもしているのではないかと案じます。真の親孝行は、ご安心をして頂くことです」（改訂『廣池千九郎語録』十頁）。

一枚（まいまい）をはたいて両親を盛大なディナーに招待したり、無理をして旅行に連れて行ったりする「分不相応の親孝行」では、親が心から安心して満足することはないでしょう。それよりも、まめに手紙やメールで近況を報告したり、帰省したときにお土産（みやげ）を渡して、そっと感謝の言葉を添えたりするほうが、親子双方の心からの安心につながるものです。

また廣池は、「どんな良いことでも、両親の意思に反してやったことは良いことにならない」「父母の心を安んずることが真の孝である」（前掲書十一頁）とも述べ、親孝行の標準となる心づかいを示しています。

例えば、働き盛りの三十代から四十代であれば、「家族のために」とか「期待に応えたい」という思いで仕事を頑張るでしょう。しかし、無理して体を壊してし

まえば本末転倒で、いくら社会的に良い結果が残せたとしても、それは途端に「親不孝」へとつながります。

その意味で、廣池の母りえが、廣池の幼少時代から繰り返し語りかけていた、家庭内での唯一の教訓「親孝行をせよ」という言葉は示唆（しそ）に富んでいます。この言葉には、「汝（なんじ）は親に孝行せよ、孝行するものに悪いことをするものはない。且つ他人に親切を尽くさぬものはない。故に孝行するものは必ず出世する」（新版『道徳科学の論文』⑦三四四頁）という意味が込められています。

「親孝行をせよ」とは、決して親から子供への強制や命令を意味するものではありません。親孝行する人は心が穏やかで、親だけでなく、周りの人にも親切で優しい心づかいと行いができるようになり、社会的にも活躍する（「孝は百行の本なり」ということを示した含蓄（がんく）のある教訓です。親から子供に伝える「親孝行してください」という言葉は、やがて親離れする日のために子供の人間力の土台をつくり、親子双方の「安心」となり、さらには社会全体が良くなるための魔法の言葉なのかもしれません。（本誌）

道徳実践の金言500編を収録
改訂『廣池千九郎語録』
モラロジー研究所・編
本体1,500円＋税
お求めは
巻末ハガキか
QR（オンラインショップ）から



改訂 廣池千九郎語録